



山口中村学園高等学校 学校だより 12月号

12月1日発行

URL:<https://www.y-nakamura.jp/>

TEL 083-922-0418 文責 鶴永幸彦

▶ 生徒たちは頑張っています。

11月27日（金）の全校朝礼で、生徒たちが部活動の大会や各種大会、検定等で入賞をした表彰式を行いました。

多くの生徒たちが、様々な大会、検定等で輝かしい成績を上げており頼もしく感じました。

学校種が上がるほど、あるいは年を重ねるほど、何かの大会、コンテスト、検定などで賞をもらうことが困難になることから、素晴らしいことです。

定期的に学校においては表彰式を行っていますが、入賞を果たした生徒たちの頑張りを顕彰することは、受賞した本人にとって名誉なことであり自信や自尊感情を高めることはもちろん、他の生徒たちにとっても自分も頑張ろうという励み、意欲にもつながります。

若い頃に夢や目標を決め、その実現に向けて日々練習に励み、努力や精進を重ね、達成できた経験と、残念ながらできなかつた経験はどちらも大変貴重です。社会人となって仕事をしていく上で、順風満帆な時ばかりではなく、苦労や失敗もあるでしょうし、その時自分を支える、くじけずに頑張ろうとする力、また立ち上がる力レジリエンスとして働くことでしょう。

「鉄は熱いうちに打て」と言いますが、若いうちに様々な苦労をすることは、きっと将来大きく飛躍、成長する上で役立つと思います。

▶ 誇れる学校をめざし、地域貢献しつつ地域で活躍

本校のめざす学校像は「生徒一人ひとりが誇りに思える学校」です。

そのため、可能な範囲で各科が積極的に様々な地域の活動に関わっています。献血、お祭り、福祉活動、地域行事など、その具体はホームページの「中村 NEWS」をご覧ください。生徒たちの様々な活動の様子、活躍ぶりが生き生きした写真を通して一目瞭然です。

学校の中では生徒としての存在ですが、いずれ社会人として地域社会を支える地域住民、市民として生活していくこととなります。地域貢献することを通して、地域を身近に感じ、地域を支えていく当事者としての意識の育成が図れればと思います。



裏面に続く

学校スローガン：誇り高く夢を道しるべに 凜と煌めくなりたい自分をつくる

12月 主な行事

今年も後一月となりました。この1年一般社会では、様々な出来事がありました。校内においては、行事の多い2学期であり、その分生徒個々にドラマがあつたことと思います。今年1年を表す漢字を、清水寺の管長が毎年の恒例行事として書かれますが、何になるでしょうか。家族において、団らんの一時に予想されたり、家族の1年を表す漢字を考えてもよいですね。

日	曜	内 容
1	月	2年修学旅行②/1・3年期末考查3日目
2	火	2年修学旅行③/1・3年期末考查4日目
3	水	2年修学旅行④/1・3年期末考查5日目
4	木	2学年振替休日
10	水	調理科修了発表会
12	金	クラスマッチ
14	日	全商英語検定
15	月	クラスマッチ、生徒会役員選挙
16	火	保護者会

日	曜	内 容
17	水	保護者会
18	木	保護者会
19	金	終業式、生徒会役員退任式、大掃除
20	土	クリスマス料理講習会 R2・3 さわやか学級クリスマス会
21	日	全商英語検定
22	月	冬季進学課外授業(～12/26) 学習相談日(～12/26)
26	金	校務納め

マラソン大会 真摯な姿、一生懸命な走りは感動です

11月19日（水）校内マラソン大会を、維新公園補助競技場をメインに実施しました。男子は5km、女子は4.6kmで、3年から2年、1年と50分間隔を開けてスタートしました。苦しさに耐えて一生懸命走っている姿は、尊く感動を与えてくれます。

本大会に向けては体育の授業で10月初旬からグラウンドや校舎の周辺を使い、長距離走の練習を行って体を慣らしてきました。校長室の窓からも、生徒たちが走っている様々な様子が伺えました。

「走姿顕姿」という言葉がありますが、その姿は心の様子を反映しているのだろうと、しばし見守りました。「一時が万事」と言う言葉も日常でよく使います。長距離走は、人生に例えられますが、決して楽なことばかりではない人生という長距離走にどんな風に向き合うのか、走る姿に人生の辛いことや苦しいことに向かう姿勢が重なります。

人それぞれ資質、能力は異なります。100の力がある人、80の力の人、50の人、それに自分の持てる力を出し切る姿勢こそ、大事なことだと思います。そこにこそ、能力の差を超えた美しさ、真摯さ、誠実さ、一生懸命さという感動を呼ぶ力があると思います。人生を切り開き、よりよくしていこうとする力でもあると思います。

いい本は人生を豊かにしてくれる

人生百年時代と言われ、平均寿命も長くなりました。その分、認知症になる高齢者の割合も高くなっています。人ごとではなく、自分もそうなるのかと不安を感じたりもします。それ以上に、自分の親がそうなった場合のことも大きな心配事です。下の本は、考えさせられます。



『百花』 川村元氣 著 文春文庫

認知症に係るお話です。母と息子の二人家族の母が認知症になり、記憶をなくしていく中で、その人がその人であるとは、人とのつながりとはについて考えさせられます。認知症がどんなものかも理解できますが、それ以上に親子の愛情に胸がいっぱいになります。親の介護は子にとって、切実な問題ですが、それまで紡いできた思い出や、日々の関わりが大切と感じました。